# 科研費研究の進捗状況報告

中　村　百合子
（立教大学准教授）

## はじめに

2010年度から2012年度の３年計画で、科研費補助金（若手B）を受けている。研究テーマは、「多様な資料の活用に対する教諭の認識に関する研究：モロッコでのアクション・リサーチ」である。その研究目的は次のとおりである。

> モロッコ王国の貧困農村地域の小学校において、多様な観点から書かれた資料の学習・教授への活用に対する教諭の認識について調査を行う。近代の学校図書館研究の成果をふまえた問いかけ、働きかけを調査者側から行いながら、多様な資料の活用による多元的な価値と文化への理解を児童に促す教育活動に対する、教諭の反応と認識の変化、また試験的・探索的に実施してもらう教育実践を記録する。その記録を、調査協力者の教諭と調査者の相互交流を行いながら分析する。この一連のアクション・リサーチをとおして、開発途上国の教育における多様な資料の意義を問い、学校図書館開発援助モデルの開発を模索する。

今まさに研究の真っ最中というところで、成果はまだまとめられないので、ここでは、この研究に着手した経緯と、現時点までの調査・研究についての中間報告をしたい。

## 本研究着手の経緯

1998年３月に修士論文を提出したときから、学校図書館史研究か、またはアメリカの学校図書館論や学校図書館事情の紹介が、私の論考の内容であった。しかし、2009年３月に博士論文を出版して、学校図書史研究でもまだまだ取り組みたいことがあると思うと同時に、ずっと関心があったが留保していた、途上国の教育に関わる開発援助の研究をしたいという気もちが強まった。これには、国際図書館連盟（International Federation of Library Associations:IFLA）の学校図書館分科会（School Libraries and Resource Centres Section）の常任委員を2005年から務めて、南アフリカ共和国のダーバンを訪れたり、各国の学校図書館事情を聞く機会が増えたりして、学校図書館の発展状況があまりにも国、地域、また学校によって違うことを痛感した、ということもあった。

どこの国にも地域でも、豊かな、恵まれた学校には、アメリカ型と思われる学校図書館が見られる[1]。しかし一方で、公立学校の学校図書館の平均的な状況は、各国・各地域の学校図書館に関わる教育制度によっている。その制度には、国や地域の学校図書館に対する一般的な理解のほかに、経済的な豊かさ、出版産業の発展の度合いがくっきりと反映されている。私は、このような学校図書館の制度に影響を与える各要素について、特に学校図書館に対する一般的な理解の背景にあるだろう、その社会の文化についてよく考えてみたいと思った。文化を見るときの視点としては、宗教に注目した。というのも、アメリカにおける近代の図書館の発展を、私はプロテスタンティズムまたはピューリタニズムの影響として見はじめていたからである。

博士論文で私は、20世紀前半期にアメリカの学校図書館論ができあがっていった経過をいくらか整理したが、その学校図書館論の重要な部分が、同じく20世紀初頭のアメリカで誕生したプラグマティズムの思想と親和性があるように思われることを述べた。20世紀前半期にあらわれて広まった、図書や図書館の利用について指導するという、大学図書館・学校図書館固有の教育内容の主張を見ていくと、その内容は、プログマティズムで言われる“探究”の思想と類似して見えた。そのあたりをもっときちんと考えていきたいと思う一方で、特異と言ってよいだろうアメリカの図書館の現在までの発展は、プラグマティズムの思想との関係では説明がつききらないように思われた。アメリカだけを見つめるのではなく、世界の図書館の発展を文化圏というような視点で見ると、プロテス

タントかピューリタンの文化と図書館の発展のつながりを探ってみるべきなのではないかと思われた。IFLAの年次大会で各国を訪れるうち、キリスト教文化圏といっても、カトリック文化圏の図書館はそれほど発展してはいないが、一方で、（アメリカやアングロサクソン文化圏に限らず）プロテスタント文化圏で近代的な図書館が発展しているように見えはじめていた。また、2010年はじめに筑波大学の吉田右子先生にお話をうかがったときに[2)]、図書館の発展に関わって、self-help（自助）とかsharing（分かち合い）とかいった、キリスト教文化圏のものと思われる思想のキーワードが出てきて、そのあと私もそれらについて考えるようになった。そうして、宗教が関心の前面に出てくるようになったわけである。

だが、キリスト教文化圏のなかで、カトリック文化圏とプロテスタント文化圏の文化と図書館の発展の関係を長期的に検討していくにしても、まずはより違いが明白なように思われる文化圏の図書館の発展を見てみたいと考えていた。アメリカと日本の学校図書館史に集中してきたが、そろそろ三角測量に挑戦してみたいとも思っていた。そこに、2009年夏にモロッコ王国の首都ラバト在住で国際機関に勤めるICT教育関係者と出会いがあり、イスラーム教文化圏であるモロッコ王国がフィールドとして浮かび上がってきた。彼女との意見交換を経て、開発援助という私が以前から関心のあった行動と、それに研究者として関与する有効な方法とみえたアクション・リサーチという調査・研究の手法を、統合的に、モロッコ王国というフィールドで用いようと考えた。そして、冒頭に述べたような研究目的を設定して研究計画をたて、そのICT教育関係者に研究協力者となってくれるよう依頼をして了解を得た。

**2010年度、研究着手元年**

研究に着手した2010年度は、アラビア語教室に通いつつ、まずは日本国内で文献収集を行って、モロッコの教育について、イスラーム教文化圏における教育について、学びはじめた。収集した関連文献を読みこみ、さらに、特にモロッコ王国の教育と図書館の事情、国際的な児童書出版・流通の現状についての理解を深めるため、次の３つのインタビューを行った。

1）早稲田大学イスラーム地域研究所所属のモロッコ研究者の佐藤健太郎氏：ダーウード図書館（Biblioteca M. Daoud）でのご経験と、現地の文化、教育、図書館とメディアについてお話をうかがった。

2）同志社大学文学部所属のイスラーム史研究者の堀井優氏：佐藤氏へのインタビューをとおして、アフリカ大陸の地中海沿岸のイスラーム文化圏への理解を深めることが不可欠であると気づいたことから、イスラーム史の中のモロッコについてお話をうかがった。

3）日本著作権輸出センター創業者の栗田明子氏：異文化で生まれた出版物の受容について、戦後、日本の絵本を海外に輸出する活動を精力的に行ってこられた、栗田氏からお話をうかがった。

これと同時進行で、ラバト在住の研究協力者とともに、現地の調査協力校および協力教員の確保にあたった。しかし、数ヶ月努力したものの、モロッコの教育省や地方自治体、学校から日本人が研究代表者である調査について、手紙やファックスだけで調査実施許可等を得ることはほとんど不可能であることがわかっただけというようなことであった。そこで11月下旬にラバトを訪問し、研究協力者の紹介で、ユネスコのラバト事務所、在モロッコ日本大使館、JICAモロッコ事務所、情報大学(Ecole des Sciences de l'Information)に伺い、研究の趣旨の説明と学校図書館の現状についてのインフォーマルなインタビューを行った。同時に、現地で、公共図書館、国立図書館、専門図書館を訪問した。そうして調査協力者の確保に努力していたが、実はこの裏で、ラバト訪問の直前に、研究協力者から、研究協力の継続が困難なプライベート上の大きな変化を告げられ、研究協力者をあらたに見つけなければいけないことになってしまっていた。そこで訪問中は、あらたな現地の研究協力者と、調査協力者となってくれる学校・教員の双方を探すこととなった。訪問中に、なんとか、読みの教育に関心があるという現地の大学教授が、研究協力を引き受けてくれる目処をつけて、帰国した。帰国後は、同教授との研究目的の調整をメールで続け、先行研究の調査と研究計画の策定のしなおし、調査用紙案の作成といったことで一年目が終わった。

**2011年度、中間年度**

そうしてあらたに出会った現地の研究協力者と調査用紙作成を続けていたところに、“アラブの春”が起きた。モロッコ王国については、日本語では情報がそれほど入ってきていないように思うが、英語では、初春、かなり状況は緊迫しているのかなと理解されるようなニュースがインターネット上に見つかった。2月20日（日）には、ラバトやカサブランカなどの大都市で、国王の権利の制限する新憲法の制定を要求するデモが発生したという（今も、毎月20日はデモの日になっていると聞く）。そういった国内の状況から、ムハンマドVI世は、国王権限を縮小し議会権限を拡大することに合意し、7月にはそのようにみえる改憲が行われた。

私は、こうしたニュースをふれながら、そのあらたな研究協力者とメール交換を継続していた。が、なんだかうまくいかない。相手がなにかぎこちない。私は、今のモロッコの人たちと話をするには自分はあまりにも世界を知らず、彼らのおかれている状況をまったく分かっていないのだと最終的にははっきり認識するに至った。別ルートからも、地方自治体の教育の責任者に手紙を届けてもらったりしたが、調査協力者を遠く離れた日本から見つけることは、うまくいくようには思えなかった。一方で、日本では3.11そして原発事故が起き、日本の情報流通も、政治から自由ではなかったことを、あらためて認識することとなった。本当の意味で多様な教材を使えていないのは、日本も同じではないかという考えが私の頭から離れなくなった。そうして私は夏までに、次の3つに方向に修正して調査を行うことを決めた。

1．モロッコについては、JICAに協力を仰ぎ、2011年度内になんとか現地の公立学校の訪問を実現し、そのうえで調査の進め方を再検討する。
2．モロッコでの調査の困難さを考えて、同じイスラーム文化であるが、王国ではなく、政治的には民主化がかなり進んでいるインドネシアでの調査をはじめる。
3．日本の学校図書館、また広く教育の関係者とともに、多様な資料の活用の基礎となる、教育者が情報の評価をいかに行って、それをいかに子どもたちに教えるか、について考える機会をもつ。この出席者の学びを記録して分析し、学校図書館における多様な資料の提供と活用に関わる現代の課題を整理する。

これらを、3、2、1の順で、このあと、取り組んで行った。まずは9月から、立教大学から資金援助を得て、さらに同じ司書課程の特任教授の永田治樹先生のご協力を得て、司書課程主催として、連続公開講座「情報を評価し、判断する力をいかに育むか」を開催した（プログラムは、本誌P.41を参照）。第1回から第4回では、毎回、参加者に対して、学びを記録してもらう調査用紙を配布し、それを回収した。

また、11月には、次の日程で、京都外国語大学専門学校のウガ・ペルセカ（Uga Perceka）先生のご紹介によって、3つのイスラーム寄宿学校を訪問することができた。この調査旅行には、京都大学東南アジア研究所助教の北村由美先生にご同行いただいて、英語でこと足りない場面で、インドネシア語の通訳を務めていただいた。

11月2日（水）
イスラーム寄宿学校 Pondok Pesantren Pabelan
11月3日（木）
イスラーム寄宿学校 Gontor Pusat（男子校）
11月4日（金）
イスラーム寄宿学校 Gontor Putri（女子校）

Pabelanで、いわゆる図書委員会の生徒たちと、学校図書館について議論した。この写真の左手には女子生徒の一群がいた。同じ場にいるが、男女は別のグループになる。

どの学校も非常にオープンな態度で、学校見学を受け入れてくださった。2日と3日は学校の敷地内に宿泊したので、生徒の生活を垣間見ること

ができた。しかし2日から4日深夜までの3日間は、3校の間を車で長距離移動しては、学校で多くの人と面会することの連続で、また前後には、ジョグジャカルタでUniversitas Islam Negeri（UIN）とその大学図書館、専門図書館等を訪問したので、たいへんな強行軍であった。

この3校の訪問をとおして、2日と4日に訪問した2校の教育が、大変興味深く思われた。3日に訪れた男子校（Gontorの本校）はエリート養成校として徹底しており、またそれとして歴史的に成功しており、教授法の改革に関心のありそうな教員に出会えなかった。また、教材等も比較的恵まれているように思われた。2日に訪れた学校は共学で小さなジョグジャカルタの郊外の町にあって、学校図書館はあるものの、蔵書の多くは古びて見え、運営はかなり古典的であり、改善の余地があるように思われた。また、4日に訪れた女子校では、男性の学校管理職たちと面会をして、イスラーム文化圏における女子教育（の保守性と言ってよいか？）について考えさせられた。そこで、2012年度にこの2校の、前者から女子高校生を、後者から卒業生の見習い女性教師を、日本に呼び寄せ、調査に協力していただくことを決めた。そして、この2人の呼び寄せの準備と予備調査の実施、イスラーム図書展（Islamic Book Fair）の見学のため、2012年3月中旬にジャカルタを再訪した。

一方で、2012年2月には、JICAモロッコ事務所および同事務所の神津宗之氏の多大なご協力によって、次のような日程の現地公立学校訪問が実現した。インドネシア同様に移動と言語のことが懸念されたが、同志社大学社会学部教授の藤本昌代先生のご紹介で、ラバト在住でムハンマドV世大学で日本語を教えておられた神尾賢二氏にフランス語通訳と案内をお願いすることができた。

2月14日（火）

ウジダ（Oujda）の公立小学校3校（Kadissia、Khalid Bin Walid、Radia Adaouia）

2月16日（木）

エルラシディア（Errachidia）の公立小学校3校（Ibnu Hazm、Ain Laatiとその分校）、技術高校（Lycee technique）

エルラシディアの公立学校の図書館兼PCルームの児童向けの図書の書架。読み物の本は、パンフレットのような薄さのソフトカバーのものがモロッコでは多く見られる。PCはどの学校にも複数台あったが、あまり使われていないようだった。

こちらも、学校訪問の前には、カサブランカ国際図書展（Salon International de l'edition et du livre:SIEL）を見学、また各地で専門図書館を含み文化・教育機関を訪問、そしてカサブランカからウジダ、ウジダからエルラシディア、エルラシディアからカサブランカと、すべて長時間の車での移動が続き、後半の訪問地であった砂漠の町・エルラシディアの夜は寒く、体力的にも精神的にも厳しい調査旅行であった。ただ、両地域で出会いがあり、2012年度以降のさらなる調査のフィールドになる可能性を感じた。特に、エルラシディアは、先住民族アマジールの土地で文化的には独特のものがある一方で、今はモロッコでも最貧困地域とみられており、文化復興・保存・発展の支援、学校教育の開発援助、というふたつの意味で、（学校）図書館の開発に関わるアクション・リサーチのフィールドにふさわしいように思われた。モロッコの公立学校での調査はほぼ絶望的に思われた2012年年明けまでの状況から、好転のきざしが見えてきた。

**これから**

科研費研究の年限はあと1年で、来年度は調査のまとめの年と計画していたので、明らかに調査

の進みは遅れているのだが、2011年度、調査協力者に出会うところまではなんとかたどり着いたので、2012年の夏までに、インドネシアからの２人の女性を日本に呼び寄せて調査を実施するとともに、モロッコを再訪して予備調査をしたいと考えている。つい最近には、バングラディッシュの調査協力者を紹介してくれる人があった。出会いが続いていると感じる。イスラーム文化圏における多様な観点から書かれた資料の学習・教授への活用可能性および学校図書館開発援助の可能性とそのモデルの探究に、今しばらく、10年単位で、取り組みたいと思っている。

1)アメリカ型と思われる学校図書館の広まり、というこの私の見方の適否は、もちろん改めて検証しなければいけないだろう。IFLAはその設立のころから、ヨーロッパが主体になっているが、私が常任委員になってからの学校図書館分科会に関して言えば、私の印象では、ヨーロッパの各国の代表が中心で議論していても、北米の学校図書館の理論や実践を目指すべき形としている感じがなんとなくある。分科会の議論は99%が英語なのが影響しているのかもしれないが、アメリカ・カナダからの委員がそれをリードすることは容易ではない雰囲気があるにもかかわらず、理論や実践については、結局、英語で書かれたアメリカ的なものを理想として落ち着いてしまう感じがあるのだ。ちなみに、アジアからの出席者は、私が委員になってから出席した会議にはずっと、私しかいない。

2)吉田右子、中村百合子「〈特別インタビュー〉図書館・メディア・教育：ライブラリアンシップの歴史から見えてくるもの」『同志社図書館学年報』No.36、2010.7、p.73-121.